

若者の自動車離れの現状

－日本と欧米諸国の比較分析－

北條 一樹

自動車業界ではずいぶん前から若者の自動車離れが大きな話題となっているが、本修士論文は、日本と欧米諸国における若者の自動車離れの実態を明らかにするとともに、その背景にある要因やその問題を明らかにしようとするものである。

第1章では、日本について、まずいつごろから若者の自動車離れということが言われるようになったのかを明らかにし、ついで各種データを分析して若者の自動車離れの実態を明らかにする。

まず若者の自動車離れという言い方であるが、今から30年ごろ前つまりバブル崩壊のころから若者の自動車離れが言われるようになったとの文献の指摘がある。しかし、初出は確定されていない。そこで新聞データベースを利用し検索をおこなったところ、2000年以降、若者の自動車離れというキーワードを含む記事が登場していることを確認することができた。少なくとも、この時期以降、若者の自動車離れという用語がメディアで広く使われるようになったことがわかった。

次に日本における若者の自動車離れの実態を明らかにするため、各種データをもちいて運転免許保有率と自動車保有率の推移を分析した。その結果、運転免許保有率は、男性は34歳以下、女性は29歳以下で低下しており、低下幅は年齢が低いほど、また、女性より男性で大きいことが明らかになった。運転免許保有率の変化からは、若い年代ほど「クルマ離れ」の傾向があり、その傾向は女性より男性で強い様子が伺える。また若者(30歳未満)の自動車普及率を男女別に見ると、1999年から2009年の間に男性では63.1%から49.6%へと13.5ポイント減少しているのに対し、女性では42.7%から43.6%へと0.9ポイント増加していることがわかった。自動車の保有率からみると、若い男性ではたしかに自動車離れがおこっているが、若い女性ではむしろ逆のことがおこっている。この背景としては、女性の就業率の高まりや収入の上昇、自動車で外出する機会や外出する範囲が以前より拡大したことなどがあると推測される。

ところで日本では、若者の自動車離れを扱った学術的研究は非常に限られている。一方、欧米

では同じテーマで多くの先行研究が存在しているが日本ではほとんど知られていない。それを整理したのが第2章である。

第2章では、代表的な5つの文献を取り上げその紹介をおこなっている。これらの文献でもっともよく対象として分析されているのはアメリカとドイツであるが、その内容は以下のようなものである。

(1)アメリカでは、2000 年半ば以降から、若者の間(特にミレニアル世代:1980 年代と1990 年代に生まれたもの)の間で、自動車の使用と運転免許の取得率が低下している。また、ミレニアル世代は以前の世代よりも自動車保有率が低下している。この背景には、若者の雇用の不安定化、人口密集地域に住む若者の増加、公共交通機関の利用の増加、カーシェアリングや Uber、Lyft、Sidecar などの企業が提供している個人間乗り継ぎサービスの普及などがある。

(2)ドイツでは、1990 年代半ば以来、若者の車による旅行需要が停滞している。免許を持っている25 歳未満の人々の数も過去 10 年間で大幅に減少している。また、若者の車の所有も減少している。

先行研究ではその他の先進国についての分析もおこなわれており、先進国の共通点として①若者の中で、運転免許の取得が減っていること、②若者の中で、自動車の保有率が減っていること、③利用に関しては、男性利用は減っているが、女性の利用は増えていること、④旅行で自動車を使つての移動距離が減っていること、が明らかにされている。

終章では、日本と欧米諸国における若者の自動車離れの比較をおこなった。その結果、共通点として、①若者の中で、運転免許の取得が減っていること、②若者の中で、自動車の保有率が減っていることがあること、また異なる点として、日本では免許の取得者数に関しては、男性は減少傾向にあるものの女性の運転免許取得数は増加傾向にある点を明らかにした。後者については、日本において免許取得についてジェンダーギャップが他の先進国より大きく、そのキャッチアップが現在も続いていることからきていると考えられる。

また近年、日本では若者の消費行動の変化を指摘する文献が増えているが、そのような観点から日本の自動車離れをどのように考えられるか考察をおこなった。

そして終章の最後では、若者の自動車離れをどうとらえるべきか考えを述べた。具体的には、自動車産業の維持・発展という観点からみると、今の若者はいずれ中年世代となり、社会、消費の中核となっていく存在である。ここでの消費の低迷は大きな問題だといえる。しかし、自動車産業の維持・発展という観点を離れれば、自動車離れはかならずしも否定的にとらえる必要はないのかもしれない。欧米の先行研究は、環境意識の高まりが自動車離れを引き起こしている部分もあると述べている。また、カー・シェアリングエコノミーの発展も、これまでとは違った産業を創出しつつあるととらえることも可能である。